

研修報告書 No.2

所 属： 昭和大学病院

研修先： 特定医療法人長生会 大井田病院

医療法人聖真会 渭南病院

宿毛市立沖の島へき地診療所

5月7日から18日を大井田病院、5月8日から9日を沖の島診療所、5月21日から25日を渭南病院で研修させていただいたことをご報告致します。

高知県での3週間の研修は、医療資源が限られている地域で、それぞれの病院が果たす役割やその分担の意味、医療従事者との連携の重要性、医師に必要な総合診療力の重要性を学ばせていただきました。

人口2万人程度の宿毛市にある大井田病院は、車で15分程の距離に急性期を担う幡多けんみん病院があるため、慢性期患者の受け皿の役割を担い、地域に根付いた医療が提供されていることを知りました。そして、外来業務、訪問診療、訪問看護、高齢者施設への往診、乳児健診、地域包括ケアセンターでの研修などで、大学病院での研修では体験しえない貴重な経験をさせていただきました。

外来業務では、一次産業が盛んな地域という特性から、普段目にする事のない外傷の患者さんをみさせていただきました。自身の所属病院でも経験したことのない症例に戸惑ってしまいましたが、先生方は迅速かつ適切に対応されていました。その場面を目の当たりにし、幅広い知識を付け総合診療の能力を高めることの重要性を学ぶことができました。

また、高齢化率の高い高知県で訪問診療、看護は、重要な役割を果たしていることも知りました。慢性の病気を抱えていても、住み慣れた土地で過ごすことを望まれている方や、県外に親族がおり独居を余儀なくされている方など、状況は様々ではありますが、その方々の健康面を、訪問診療、訪問看護でサポートしていくことが、高齢化が進む日本で今後必要であるということを教えていただきました。加えて地域包括ケアセンターでは、介護保険の役割は、高齢者の健康を保つことであることを学びました。また普段、所属病院では急性期を過ぎた患者さんは、他病院や施設に転院していくところまでしか関わりがありませんでした。しかし、その後の患者さんをサポートしているのは医療従事者だけでなく、ケアマネージャー、社会福祉士、保健師など様々な職種が連携していることを知りました。

また、週1回、乳児健診にも同行させていただきました。少子化のため子供が年々減っていく現状だけでなく、高知県で産婦人科、小児科医が不足している現状を知り、驚きました。専門医がないことで安心して出産、子育てができなければ、さらに人口減少が進んでいく過疎化問題を目の当たりにし、医師の偏在が深刻な問題であるということを知りました。自分は将来どこで医師として働きたいか、考えるきっかけとなりました。

人口1万3千人程度の土佐清水市にある渭南病院は、市唯一の中核病院として急性期の受け入れから、慢性期の患者さんが自宅退院を目指しリハビリを行う地域包括ケア病棟まで幅広い役割を担う病院で、急性期だけでなく、患者さんが入院してから自宅退院までみるため、新しい視点を学ぶことができました。リハビリを積極的に取り入れること、また栄養不良の患者さんに対し胃瘻をためらわないこと、慢性期患者だけでなく終末期患者さんも自宅退院させるために、住宅評価が重要であることなど、たくさんのことを教えていただきました。

特に住宅評価は、看護師、ケアマネージャーの方々と共に、実際に自宅退院をされる患者さんのご自宅に行かせていただき大変印象に残っています。自宅の状態を把握し、必要な道具、サービスは何か、様々な職種が連携して患者さんをサポートしており、チーム医療とはこういうものだということを知ることができました。

最後に、3週間と短期間ではありましたが、とても得難い経験をさせていただき、大井田病院、渭南病院の皆様には感謝申し上げます。以上をもって報告とさせていただきます。